



TITLE:

支那生祠小考

AUTHOR(S):

長部, 和雄

CITATION:

長部, 和雄. 支那生祠小考. 東洋史研究 1945, 9(4): 229-243

ISSUE DATE:

1945-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145832>

RIGHT:

支那生祠小考

長 部 和 雄

(一)

支那に於ては古來地方民政の功勞者を生き乍ら祠堂に祀る風あり、之を生祠と云つてゐる。私の知り得た限りでは兩漢時代より明代に至る迄、其の例實に五十三箇祠を枚擧することが出来るが、今日迄に之を主題とせる研究の發表ありしを寡聞にして未だ聞き及んでゐない。件し其の事實を指摘し、且つ之に對し一家の言を寄せられし學者は古來絶無とは云ひ難く、古くは北宋の朱翌撰『猗覺寮雜記』(學海類編本)卷六に、

生祠始于定國之父。郡中生于公祠。後漢潛山人生立。白馬陳從事。祠陳衆。廣都韋祠。巴郡王堂。九真任延。武威張奐。晉之廣中丁綰。池陽令杜軫。梁何遠令武康。守宣城。及新興內史。皆立生祠。齊新安。伏暉。唐義新軍袁滋。潭馬殷。吳越

錢鏐。靈州韓遜。

とあり、後漢の潛山人と齊の新安とは何たるか遽かに判定し難いのであるが、于公^①・陳衆^②・韋義^③・王堂^④・任延^⑤・張奐^⑥・丁綰^⑦・杜軫^⑧・何遠^⑨・伏暉^⑩・袁滋^⑪・馬殷^⑫・錢鏐^⑬・韓遜の十四箇生祠を擧げ、其の起原を漢の于定國の父に由來することを説破してゐる。此の間丁綰は丁紹の誤記たること、韋祠とは韋義の生祠の謂ひである。

次に南宋の程大昌撰『演繁露』(學津討原本)卷五にも生祠の項ありて、

于定國爲東海軍決曹。決獄平。郡中爲立生祠。生而立祠。此似無謂。人已死乃須立廟而血食。誰當享之。然而于公聽之。不辭者習見。時事以爲當然也。秦始皇自立極廟。漢諸帝生自立廟。故賈誼對文帝而曰。願成之廟。號爲太宗。則生祠殆例此也。

と云ひ、于定國の父の于公祠を于定國の祠と誤認してゐるが、生祠の意義に對し甫めて説を成せるは聴く可きである。

次に明の張鼎恩の『瑯琊代醉篇』卷十五に、于定國の父・陳衆・韋義・王堂・任延・張奐・丁紹・杜軫・袁滋・馬殷・錢繆・韓遜・荀勗・狄仁傑の十四箇生祠を擧げ、李朝の丁若鏞撰『牧民心書』卷四十八にも、石慶・欒布・荀勗・童恢・五井義・王堂・杜軫・陸雲・狄仁傑・王敬伯・韓魏公・張綸・高賦・徐九恩・陳鑑の十五箇生祠を掲出し、清の趙翼の『陔餘叢考』卷三十二にも、欒布・石慶・任延・王堂・韋義・陳衆・狄仁傑・呂諱・李穀・張兀・韓魏公の十一箇生祠を掲出せるは加藤玄智博士の『本邦生祠の研究』卷頭に紹介されてゐるが、其の大部分は已に朱翌、程大昌の兩人が夙に指摘せる所に係つてゐる。

猶ほ趙翼と並び稱せられてゐる清初の碩學顧炎武の『日知錄』卷二十二にも生祠の一項ありて、

漢書萬石君傳。石慶爲齊相。齊人爲立石相祠。于定國傳。父于公爲縣獄吏。郡中爲之立生祠。號曰于公祠。漢紀欒布爲燕相。有治迹。民爲之立生祠。

此後世生祠始。今代無官不建生祠。然有去任。未幾而毀其像。易其主者。舊唐書狄仁傑爲魏州刺史。人吏爲立生祠。及去職。其子暉爲魏州司功參軍貪暴爲人所惡。乃毀仁傑之祠。則唐時已有之矣。

と云ひ、石慶・于公・欒布・狄仁傑の四生祠を擧げると同時に今代生祠の起因及その本質に就きて論及せるは心して聴く可き言説である。

私も嘗つて大阪府女子専門學校國文國史學會編輯『國文國史』創刊號誌上に『生祠に關する二三の史料』と題して、程師孟・趙尙寬・劉航・李復圭の四箇の未知の生祠を紹介せしことあり、亦近くは高野山大學密教研究會編輯の『密教研究』第八十五號所載の拙稿『唐の代病の事蹟と其の師資關係に就きて』の中にも代病に生祠の事實ありしことを披瀝して置いた。

併し其の後私の手許に蒐集し得た生祠の實例は此の小論を中心となつてゐる董昌を始めとして、淳于祭・翟溥福・王源・湯紹恩・眞德秀・宋遊道・劉徽柔・脫・羅適・王重盈・魏忠賢・張蒙・孫遇・王回顯・劉秩・費瑄の十七箇生祠に及んでゐる。けれども以上五十三箇生祠の中には典據不明の者もあり、姓名の誤り

傳へられし者もあり、生祠ではなくして生碑の事實を筆者が誤解せる者もあつて悉くを詳にすることは出来ない。而乍ら之を以て觀れば生祠の事實は支那社會史上決して稀有ではないと云ふことが明かとなつたのである。

(二)

今より支那生祠の一般的性格を究明する段となつたが、先づ最初に右の五十三箇祠の實例に就き其の典據を明かにして置かう。

即ち于公⁽¹⁾（漢書卷七十・一子定國傳）・陳衆⁽²⁾（典據不明）・韋義⁽³⁾（後漢書卷五十六・韋義傳）・王堂⁽⁴⁾（後漢書卷六十一・王堂傳）・任延⁽⁵⁾（後漢書卷六十六・任延傳）・張奐⁽⁶⁾（後漢書卷九十九・張奐傳）・丁紹⁽⁷⁾（晉書卷九十九・丁紹傳）・杜軫⁽⁸⁾（上同）・何遠⁽⁹⁾（梁書卷五十五・何遠傳）・袁滋⁽¹⁰⁾（舊唐書卷百八十五・袁滋傳）・馬殷⁽¹²⁾（典據不明）・錢鏐⁽¹³⁾（舊五代史卷百三十三・錢鏐傳）・韓遜⁽¹⁴⁾（舊五代史卷百三十三・韓遜傳）・荀勗⁽¹⁵⁾（典據不明）・狄仁傑⁽¹⁶⁾（舊唐書卷八十九・狄仁傑傳）・石慶⁽¹⁷⁾（史記卷百三十三・石慶傳）・樂布⁽¹⁸⁾（漢書卷三十七・樂布傳）・荀勗⁽¹⁹⁾（史記卷百三十七・荀勗傳）

（典據不明）・童恢⁽²⁰⁾（典據不明）・五井義⁽²¹⁾（典據不明）・陸雲⁽²²⁾（上同）・王敬白⁽²³⁾（上同）・韓魏公⁽²⁴⁾（宋史卷三百一十二・韓琦傳）・張綸⁽²⁵⁾（宋史卷四百一十二・張綸傳）・高賦⁽²⁶⁾（宋史卷四百一十二・高賦傳）・徐九思⁽²⁷⁾（明史卷二百八十一・徐九思傳）・陳鑑⁽²⁸⁾（典據不明）・呂誼⁽²⁹⁾（舊唐書卷百八十五・呂誼傳）・李穀⁽³⁰⁾（宋史卷二百六十六・李穀傳）・張兀⁽³¹⁾（宋史卷三百一十二・張兀傳）・程師孟⁽³²⁾（宋史卷四百一十二・程師孟傳）・趙尙寬⁽³³⁾（上同）・劉航⁽³⁴⁾（長編卷三百二十七・劉航傳）・李復圭⁽³⁵⁾（宋史卷二百九十一・李復圭傳）・代病⁽³⁶⁾（宋高祖傳）・黃昌⁽³⁷⁾（新唐書卷二百二十五・黃昌傳）・淳于⁽³⁸⁾（平廣記卷二百九十一・淳于傳）・王源⁽³⁹⁾（明史卷二百八十一・王源傳）・湯紹恩⁽⁴⁰⁾（南柯記）・翟溥福⁽⁴¹⁾（明史卷二百八十一・翟溥福傳）・劉徽柔⁽⁴²⁾（金史卷九十九・劉徽柔傳）・脫脫⁽⁴³⁾（元史卷四十・脫脫傳）・羅適⁽⁴⁴⁾（羅君生祠堂記）・王重榮⁽⁴⁵⁾（全唐文卷八百十・王重榮傳）・魏忠賢⁽⁴⁶⁾（明史卷二百二十五・魏忠賢傳）・張蒙⁽⁴⁷⁾（大明一統志卷十六）・孫遇⁽⁴⁸⁾（上同）・汪回顯⁽⁴⁹⁾（上同）・劉秩⁽⁵⁰⁾（上同）・費瑄⁽⁵¹⁾（乾隆大清一統志卷七十一）

の如くであるが、此の典據不明の生祠九箇祠を除き、残る四十四箇祠を時代別に列記すれば左の通りで

ある。

漢代—^①于公・^②韋義・^③王堂・^④任延・^⑤張奐・^⑥石慶・

^⑦樂布(計七祠)

晉代—^⑧丁紹・^⑨杜軫(計二祠)

梁代—^⑩何遠・^⑪伏咄(計二祠)

北齊代—^⑫宋遊道(計一名)

唐代—^⑬袁滋・^⑭狄仁傑・^⑮呂諲・^⑯代病・^⑰董昌・^⑱淳于

玢・^⑲王重盈(計七名)

五代—^⑳錢鏐・^㉑韓遜(計二名)

宋代—^㉒韓・^㉓逖・^㉔張綸・^㉕高賦・^㉖李穀・^㉗張元・^㉘程師孟・

^㉙趙尙寬・^㉚劉航・^㉛李復圭・^㉜眞德秀・^㉝羅適(計

十一祠)

金代—^㉞劉徽柔(計一祠)

元代—^㉟脫脫・^㊱張蒙(計二祠)

明代—^㊲徐九思・^㊳翟溥福・^㊴王源・^㊵湯紹恩・^㊶魏忠賢・

^㊷孫遇・^㊸汪回顯・^㊹劉秩・^㊺費瑄(計九祠)

以上の如く漢・唐・宋・明の様な文獻の饒多なる王朝に其の遺聞の豊富なるは何等異しむに足りないが、碑史紀聞の多きこと浩として渾海の如き支那史上に於ては、まだまだ此の種の史料は存するものと思ふけれ

ども、一先づ右の四十四箇生祠を資として研究を進めて見よう。

(三)

紙面が極限せられて來た爲め、關係史料の原文を引用することは勿論、その梗概を抄出することすら差控へねばならなくなつたから、隔靴搔痒の憾みあるは免れないが、此の點偏へに識者の御賢察を乞はねばならない。

扱て已に紹介を済ました如く、『日知錄』に云へる「今代無官不建生祠。」とは蓋し一代の碩學さすがに顧炎武の達見にて、以上の諸實例を一瞥した結果から申せば、敢へて今代に限らず生祠に祀られし者は唐の天台山の僧代病を除き悉く官吏にて、特に地方行政官乃至司法官に限られてゐる様である。

例へば郡太守爲りし者には王堂・任延・何遠・伏諲等あり、縣令爲りし者には韋義・杜軫あり、刺史爲りし者には袁滋・狄仁傑・董昌・錢鏐・李穀等あり、知州爲りし者には高賦・張元・程師孟・趙尙寬・李復圭・眞德秀等あり、知府爲りし者には王源・湯紹恩の兩人

あり、節度使爲りし者には董昌・王重榮の兩人あり、轉運使爲りし者には李穀・李復圭の二人あり、制置使亦是發運使爲りし者には張綸あり、經略招討使爲りし者には韓琦あり、功曹使爲りし者には杜軫あり、獄吏爲りし者には于公・羅適ありと云つた有様に、彼等は悉く地方行政特に功罪・決獄・賦課等を己が權限としてその掌中に收めし地方官である。勿論此の中には王堂の如き西羌討伐の勇將、伏誦の如き翰林學士もあるが、共に地方行政官を歷任せし者に限る事實は特に注目すべきである。亦魏忠賢の如きは宦官であるが、之亦地方官とは密接な關係に結ばれてゐる間柄である。孰れにせよ百姓庶黎の聚落到に於ける日常生活に直接關係深き官憲のみである。

是に於て私の最も不可思議に感ぜずに措かれない所以の者は、支那の様な古來社會の自治組織の發達せし國土に於ては民間に於ける自治功勞者も隨分尠くなかつたと察せられるに拘はらず、此の種の者にて生祠に祀り上げられし實例は私の管見の及ぶ限りに於ては、獨り彼の代病を除き他に一人も見當らないと云ふ事實である。此の事實は支那生祠の發生を稽へ、其の性格

を理解する上には極めて肝要であると思ふのである。畢竟官憲爲りし者にて且つ地方民の生活と密接なる關係を結ぶ者に非ざれば生祠に祀られた實例なしと云ふことは、支那社會に於ては庶民と地方官との利害關係の裡に特殊事情が介在し、之なくしては生祠は成立しないと云ふことを意味する者である。随つて此の間の事情を賢察するに非ざれば、支那生祠の實體に關し正確な知識を得ることは困難であると云はねばならぬ。

併し或は論者あつて、生祠の如き政治史上の正面に非ずして社會史の一側面を物語るに過ぎない事柄に關しては、民間側の史料は他の幾多の同種の例に漏れず、之を逸して傳はらないのであると云はれるかも知れない。けれども敢へて私は主張するが、已に明白な如く生祠の一般性から稽へて、將又以下論究する如く純然たる民間人の生祠の如き者が成立する筈なき官民相互間の特殊關係に想到せば、蓋し之亦當然ではあるまいか。故に彼の代病の一例の如きは寧ろ例外と云ふ可く、實に單文孤證である。随つて私は支那生祠の大多數は依然地方行政官に多く見る所であると考へ大誤なからんと思ふ者である。果たして鄙見が正鵠を得た

りや否や、左に愚考を開陳し以て博雅の是正を仰ぐこととする。

扱て然らば茲に謂ふ地方官と庶民との關係の裡に存する特殊事情とは如何なる者なりや。之を闡明するには官憲及庶民の雙方側より考察する必要がある。便宜上先づ官憲側より考察を試みて見よう。

最初に支那官吏の品隋特に所謂良吏とか循吏とか稱揚せられる者の實質を検査する必要がある。周知の如く支那官僚には古來貪官汚吏の多きを以て聞えてゐる故に縱令歷代の正史が概ね酷吏の傳を立て、之に對比せしめて良吏若しくは循吏の傳を立て、之を讃嘆せるも、吾人は之を無條件に所傳の儘信憑することは致し度くないのである。

抑々良吏若しくは循吏と酷吏との相違が奈邊に存するやと云ふに、先づ『史記』卷一百十九循吏傳を觀るに、

太史公曰。法令所以導民也。刑罰所以禁姦也。文武不備。良民懼。然身修者。官未嘗亂也。奉職循理。亦可以爲治。何必威嚴哉。

と云ひ、循吏爲る者は先づ身を修むる有徳の士でなく

てはならぬことを強調し、同時に法令刑罰は民を導き姦を禁する所以の者であるが、之のみにて文武備はらざれば良民は唯懼れるのみにて眞の治を致したとは云へないと稱し、畢竟法治政治を施行する者は民懼れて默するも循吏に非ずと云ふ。随つて『索隱』が注して、「謂本法循理之吏也。」と云へるは司馬貞の謬見にして、循吏の本義ではないのである。

之に對して同じく『史記』卷一百二十二酷吏傳を觀るに、

孔子曰。導之以政。齊之以刑。民免而無恥。導之以德。齊之以禮。有恥且格。老氏稱上德不徳。是以有徳。下徳不失徳。是以無徳。法令滋章。盜賊多有。太史公曰。信哉是言也。法令者。治之具。而非制治清濁之源也。昔天下之綱常密矣。然姦僞萌起。其極也。上下相遁。至於不振。」云云

とあり、此處に於ても徳治政治を謳歌し、法治家たる酷吏の不可なる所以を醇々と説いてゐる。

故に法令に依る嚴罰主義を以て民に臨みし者が酷吏にて、然らざる者が循吏若しくは良吏たることは極めて明白であり、亦此の見解は漢代以後と雖も概ね不變

であることも『漢書』以下の歴代の正史の循吏若しくは良吏の傳が『史記』循吏傳の主旨を冠頭に掲げるを以て明かであり、之亦終始德治政治を謳歌せる支那帝國としては當然の結果であらう。

かるが故に治績の大小如何に拘はらず、概ね德治家を稱揚し、彼等を循吏若しくは良吏に列し、之に反して法治家を酷吏に擧げてゐる支那正史の筆法には注意せねばならないのである。例へば孫叔敖他四名は『史記』循吏傳に專傳ある代表的循吏であり、邳都他十一名は同酷吏傳の代表者であつて、數の上に於ては後者が超かに前者を凌駕し、德治政治を標榜せる漢代に於て法治家の多かりしは一見奇異の念を抱かせしめずには措かない。而し之は苛斂誅求の僻ある法治主義政治家を筆誅せんが爲めに春秋の筆法を以てせる者と考へられないこともないが、『史記』酷吏傳には太史公も云へる如く其の廉者は以て儀表とするに足る者もあつたのである。

是に於て私は支那官吏の通有性から推測して、彼等が俗惡貪慾の程度は所謂良吏酷吏雙方共に大部分の者に就いては大差なかりし者と稽へてゐる。

或は論者あつて更に鄙見を以て正史上に歴然と區別されてゐる良吏と酷吏とを同一視する暴論なりと反駁されるやも測り難い。けれども私見に依れば已に開陳せし如く、此の兩者は施政方針の相違から私利を營むにも、一方は德治政治を標榜せるため、之が圓曲穩密の裡に行はれ、他は法治主義を施行せるため、之が端的露骨に顯はれてゐるに過ぎないのであつて、雙方固より大多數は同質の俗吏なのではなからう歟。猶ほ德治政治を以て治世の極となせる歴代政廳は之を表看板となして民に臨みし者を特に推賞し、然らざる者に筆誅を加へざるを得なかつた爲め、一見兩者の品階迄も著しく異なる如く觀取されるのではなからう歟。故に支那官吏を評價する場合は、假令それが良吏傳に擧げられてゐる人物と雖も、一應之を疑はざるを得ないと同時に、酷吏傳の人達も直ちに劣惡の官吏なりと白眼視することは出来ないと思考致す次第である。

是を以て觀れば、良吏傳に擧げられ且つ生祠に祀り上げられし人物も果して正真正銘の良吏なりや否やすら寔に疑はしきのみならず、私は寧ろ此の種の所謂良吏こそ德治を粧ひ美名に隠れて營利虚榮に寧日なか

りし惡質の官吏にて、彼等こそ一層警戒を要する偽善的官吏ではなからうかとすら考へてゐる。私の此の臆斷が的中せるや否や、之を明かに立證するには彼等が生祠に祀り上げられるに至りし動機及顛末を詳にするに如くはない。亦之に依り支那官憲と庶民との特殊關係を庶民側より考察することにもなるのである。

先づ第一德政により風化大いに與り、教導宜しき爲め生祠が立てられたと云ふ者には、張奐・任延・杜軫等あり。

次に賦斂を平均し或は之を立替へしたためと云ふ者には張奐・伏誼・呂譚等あり。

第三には外敵の侵寇するを攻討し、民の軍役を免除し、民を農畝に放歸せしめたと云ふ者には王堂・狄仁傑の兩人あり。

第四には隄を築き濤患を除き、陂渠を復疏して榛莽地を膏腴地となし、亂田を開墾し、良田に灌漑して流民を救恤し戸數を著しく増加せしめし者には張綸・高賦・程師孟・趙尙寬・湯紹恩等あり。

第五に途巷を開き、道普請を行ひ、民の牆屋を修葺し、窮民を濟恤し、民利を増加せし者には何遠・徐九

思の兩人あり。

第六には賞罰を嚴加しても決獄を公平にし、訟を聽くに果斷、疆風を觀ること仇讎の如く、貧細を觀ること子弟の如く、爲めに牢獄は空虚となつたと云はれてゐる者には于公・張奐・章義・何遠・劉徽柔等あり。

外に貪利を除きし者に宋遊道あり、物價を平準せしめし者に張元あり、白鹿書院を復興せし者に翟溥福等あり、亦言はずして齊國大いに治ると云ふ石慶の如き特殊な例もある。

斯様に彼等は善政の限りを盡してはゐるが、中には其の治績の眞價曖昧なる者もあり、例へば趙尙寬の如き其の實例にて『宋史』の高賦の傳に徵せば、「前守尙寬舊墾に力を遣らず」云云と云ひ、趙尙寬の傳とは全く正反對の意見を述べてゐる。故に右に述べた諸治績を讀んで、直ちに悉く無批判に感佩することは出来ない。而し孰れにせよ之だけの事は云へ得ると思ふ。即ち彼等は例外なく庶民生活の弱點を鋭く洞察し、其の苦患とせる所を巧に療せし者ではあるが、人心を把握するに敏にして、先づ恩惠を前賣して而る後に相應の報酬あらんことを象明しとものづかう。

随つて皮相的見解を以てすれば、彼等は徳治主義の師表の如く觀ゆるも、實は決獄に賦課に將又軍役に、生祠に祀られんことを豫期待望して恩惠を施せる虚榮に驕れる野心家ではなかりし耶と疑はざるを得ないのである。

之に對して百姓も亦さる者乍ら、如何なる心構へを以て彼等官憲に臨みしやと云ふに、官吏の奢惡貪慾に慣らされてゐる彼等は坐して嚴罰を加へられ、苛斂誅求を被るより積極的に貪官汚吏に働き掛け、先づ彼等を生祠に祀り上げることにより彼等の徳治的野心を満足せしめると同時に、尠くとも彼等をして外面は循吏たるの假面を被らしむるに成功し、彼等より甘受せねばならぬ損害を未然に防止せるのみならず、寧ろ彼等より相當の利益を享受せし者ではなからう歟。

斯くの如き内面的事實を實證するに足る百姓側の史料は、事の性質上今直ちに茲に提示することは出来ぬが、夫れは良吏の性格の反面に百姓をして容易に其の間隙に乗ぜしむるに足る所を必ず備へてゐる事實に想到すれば、思ひ半ばに過ぎるであらう。

一例を擧ぐれば狄仁傑の如きも嘗つて北州の判佐爲

りし時、吏人より誣告せられしことあり。此れ即ち必ずや彼の性格に不純なる反面ありし爲めに外ならず、亦大理丞爲りし時、滯獄者一萬七千人を斷ぜしことも、孝友人に絶し、則天武后の殊遇を蒙りし政界の大立物たりし彼も意ひの外その性格に激しき反面のありしを有力に物語る者であり、之が懸がては百姓をして巧に其の機に乗ぜしむるに十分な短所となる者ではなからうかと思はれる。

之等の事實を凝視すれば、百姓側に於て常に機先を制し、本來の貪官汚吏をして尠くも外面は良吏に仕上げ、其の名利虚榮を満足せしむると同時に、彼等百姓も亦尠からず民利を享受せねば已まない恐る可き技倆を備へてゐたことを認めねばならない。

殊に『後漢書』卷六十七酷吏傳に、

漢承戰國餘烈、多豪猾之民。云云

と云へるは漢代以來の此の間の消息を爲政側より觀測せし有力なる證言である。故に兩漢已來桀健の民が邦邑閭里の間に雄張せるを以て、民に臨むるの職に在る者は威斷を以て姦軌を族滅せねばならず、民も亦之に對應して機先を制し、酷吏の鋒先を封じる必要があつ

たのである。之則ち生祠發生の庶民側より考察せし主因である。

而し乍ら生祠の發生には今一つ別箇の原因がある。

夫れは下級地方官吏が上長官吏に阿諛せんがために、偶々百姓間に生祠建立の議起らば自ら進んで之に合流せるのみならず、寧ろ之が指導的立場に於て此の舉を助成せしためである。其の證左として現に任延・王堂・狄仁傑・呂誼・董昌・李穀・湯紹恩等の場合は「吏民」・「士民」・「人吏」・「郡人將吏」・「上將佐下緇黃耆艾」等が爲めに生祠を立つと云へるを以て實證することが出来る。要するに之等は生祠建立の動機を側面より物語る者と見做さねばならぬ。

以上が支那地方官憲と其の住民庶黎との間に介在せる特殊事情であり、之が總ては支那生祠發生の主因であると同時に、地方民政の功勞者であつても民間人たる自治功勞者に殆んど生祠の實例なき根本的理由である。

併し論者は或は亦之は餘りの曲解に依る牽強なる臆説ならずやと難するかも知れない。けれども私にも斯く解しなければ支那生祠の本質を十分に理解し得ない

と考へてゐる傍證を數々提出することが出来るのである。

(四)

先づ第一には已に援用せし如く、宋の程大昌の『演繁露』に、

生而立祠。此似無謂也。人已死乃須立廟而血食。今也生而立廟誰當享之。

と云へる通り、支那宗廟の法に鑑みれば、生ける者を祀ると云ふことは凡そ無意味であると。尤も小柳司氣太博士(『東方學報』東京第一所載)は『楚辭』卷第九禮魂に、宋玉が生存中の屈原の魂を招く「招魂の序」あるを指摘せられてゐるが、博士の説を聽けば、猶ほ其の文辭中特に生存者の魂を招くと云ふ意は明白でないとのことである。故に支那に於ては古來生存中の者を祀ると云ふ不自然なる法は存しないのみならず、先秦時代には亦その實例も發見し得ないのである。

第二には森三樹三郎學士(『支那學』十一ノ一所載)は支那の祭神は山川五行星辰たると人物たるとを問はず、生前官僚として國家經濟に直接間接寄與なした功

勞者と見做し、之に官僚的性格を附與し、國家的祭祀の對象として祭るのが原則であつて、城隍廟・土地廟・生祠の如きも評判良き令名高き地方官吏を祀りし者であり、獨り國家的祭祀の對象として祀られし神々だけでなく、民間信仰の神々までが著しく官僚的性格を有してゐる事實は、官僚的生活に對する支那民族の憧憬が如何に強烈であつたかを物語ると云へようと云ふ意味の見解を發表せられた。

然るに生祠は已に幾多の實例に徴し明白な如く、國家的祭祀の祠堂には非ず、森學士の云はれる民間信仰の神々の一例として之に官僚的性格を附與し、國家的祭祀に準じて祭られた者ではあるが、祭祀宗廟の法に背く祠堂である。即ち坊間聚邑に於ける吏民が上來縷說せし理由に因り發起し自ら成立せし祠堂たる點が生祠と他の諸祠と著しく趣を異にせる所である。

斯様に支那傳統の祭祀宗廟の法に戻りて迄生祠の出現せし所以は、一應郷閭に於ける百姓邑人が祭祀宗廟の法に暗かりし爲め、良吏を敬愛するの餘り其の高徳を旌表せんとし、之を生き乍ら祀りし者と解されぬこともあるまい。例へば張奐・杜軫・宋遊道・袁滋・錢

繆・韓遜・韓綺・張綸・趙尙寬・李復圭・眞德秀・劉徽柔・脫脫・徐九思・翟溥福・王源等の諸生祠の場合には、「州縣民」「邑人百姓」のみに依り建設されたと傳へてゐるが、而し彼等が悉く無學文盲の低劣極まる無知なる階級とは惟はれず、必ずやその中には有識の村夫子も幾多加入せる者と推想される故、斯る解答は全面的に承服することは出来ない。

即ち第三節に於て縷々說述せし如く、彼等が敢へて祭祀の法を干犯して迄も生祠を設立せしは、獨り盛徳顯彰の爲めに非ず、明かに他意ありて此の舉に出でし者であらうと想はれる。目前の利害得失を控へては、祭法上の是非などは更に意に介する暇なき大衆は、何分にも利益應酬の渺からざらんことを豫測し、地方長官を清濁を問はず生祠に祀り上げし者と解する外はない。若し百姓にして眞に高德廉潔の良吏を顯彰する意圖ならば、必ずしも生祠に依る要はない筈である。

例へば『漢書』循吏傳の文翁の蜀に於ける、同じく朱邑の桐鄉に於ける、同じく召信臣の南陽に於ける等の如く、夫々終焉後に其の任地の邑人達が祠堂を立て歳時に之を祀り、永く其の高徳を偲び居るではない

歟。敢へて生祠でなくてはならぬ理由は毫も發見されぬ。彼等こそ實に良吏中の良吏の典型にて、斯くあつてこそ百姓がその高德を追慕せるの純情が遺憾なく形の上に顯はされてゐると云ふ可く、其の間何等不純なる動機が包藏されてゐない。

然るに『後漢書』の循吏傳になると、王奐の安陽に於ける、同じく許荆の桂陽に於ける如く、死後その祠堂の立てられし例もないではないが、任延の如き生祠の實例新たに發生し、以下『晉書』良吏傳の杜軫、『梁書』良吏傳の伏願、『兩唐書』の良吏及循吏傳の袁滋・呂諲、『宋史』循吏傳の程師孟・張綸・趙尙寬・高賦の四名、『明史』循吏傳の徐九思・翟溥福・王源・湯紹恩の四名の如き實例相繼ぎ、此處に更めて良吏と生祠との特殊なる關係を稽ふ可きである。

即ち『明史』循吏傳三十九名中死後祠堂に祀られた者に陳幼學・龐嵩・段堅范・希正・李湘・張宗璉の六名を算するのであるが、生祠に祀られし者四名と比較すれば、同じく循吏とは云ひ乍ら其の間性質が自ら異なる者と想ふ可きであらう。

故に鄙見を以てすれば、良吏と雖も生祠に祀られし

者は偽善的良吏と斷する外はない。若し循吏にして正身正銘の循吏ならば、彼の宋の李穀の如く生祠建立を懇議してゐるではない歟。因みに彼が『宋史』循吏傳に擧げられず、別に專傳の樹てられてゐる所以の者は、彼が並々の循吏に非ず、名實共に眞の循吏たるの證左でなくて何であらう。亦魏忠賢の場合の如き『明史紀事本末』卷七十一では、熹宗は最初之を許さなかつた旨述べられてゐるではない歟。

第三には顧炎武の道破せる

今代無官不建生祠。然有去任。未幾而毀其像。易其主。

と云へる事實である。彼の狄仁傑の生祠が毀損せられしは『兩唐書』の同人の傳に據れば、其の子暉が不肖にて魏州の民に迷惑を及ぼし、之を毀る所であると云ふからに、世に云ふ所の「坊主が悪けりや袈裟迄悪い」と云ふ謗言の筆法に則るのかも知れないが、その舉動の餘りの輕薄さには啞然たらざるを得ない。

隨つて古くは宋代に就いて見るも、例へば『夢梁錄』(學津討)卷十四祠祭の項に、忠節祠・仕賢祠・古神祠・土俗祠・東都隨朝祠・外郡行祠等の諸祠名が見えるが

生祠の名稱は發見出來ず、亦近くは清朝の實情を察するも、例へば『清代文集篇目分類索引』雜文之部碑記祠墓條下の專祠中に昭忠祠以下多數の祠名を列記するも生祠てふ名稱見えず、亦『皇朝文獻通考』卷一百五羣祀考にも多數祠廟名を列擧せるも生祠の見えないのは、已に第二項にて論究せし如く、一は生祠が國家的祭祀の對象でなかつたに因る者ではあるが、今一つは之が不純なる動機に因り建設されし者多かりしと想像される故、生祠神が死後忽ち祠堂が毀損せられ、廢滅に歸せし者多數であつたと稽へざるを得ないのである。

以上あらゆる角度より考察せる結果を以て觀れば、支那生祠の殆んど大部分は不純なる動機に因り設立されし者爲ること疑ひなく、隨つて酷吏傳の生祠宋遼道、逆臣傳の生祠董昌、宦官の生祠魏忠賢等の如き者存するも敢へて不可思議とするに足らないと同時に、忠義・孝友・烈女等の傳に生祠の事實なきも定に故ある者と云ふ可きである。

併し私は生祠の悉くが斯る不純なる者と云ふのではない。例へば石慶の如きは父祖傳來の家行孝謹の風卓

越せしを以て、齊相を爲るに及んで齊國云はずして治ると稱せられ、正純至上の生祠の一例であらう。代病の如きも身は官憲に非ずして一介の地方遊説の天台國清寺より出でし旅僧であつたから、その權勢を恃んで民に恩惠の前賣をなし、私利を營む旁々生祠に祀られんことを豫期し得る様な立場に在つたとは思はれない。故に宗教家爲りし彼に於ては生祠設立の動機に欺瞞の野心が伏藏せられてゐたとは考へられないが、若し或は他の一般的諸實例より類推して、彼をして密語を誦せしめ、息災祈願をなさしめる爲めに彼を豫め生祠に祀り上げたと云はん歟。之こそ餘りの曲解強辯なりと許さねばならぬ。何故ならば彼の呪力を信じその教風に靡きし河南洛陽の民は、比較的無知蒙昧素朴にして祠法にも聞き一般大衆に限られたりと想はれるのみならず、河南地方は蜀と共に古來特に廉平の聽え高かりし眞の循吏に恵まれてゐたから、同地方の百姓も比較的純朴にて他地方の夫等とは著しく異つてゐたのである。即ち其の證左は『漢書』卷八十九循吏傳に、

是時循吏。如河南守吳公。蜀守文翁之屬。皆謹身帥先。居以廉平。不至於嚴。而民從化。云云

とあり、河南の民は漢代已來異色ありし者と知る可きである。

右の如き一二の例外は格別として、上來縷説せし通り、支那生祠の大部分は決して所傳の如き德治政治の旌表とでも評す可き聖者の祠堂には非ずして、官民雙方の欺瞞に依り支那の如き德治政治の行はれる社會にあつてこそ成立し得た假面を被り偽裝を纏へる生神の堂宇である。

此の意味から云へば、酷吏たる北齊の宋遊道、逆臣たる唐末の董昌、宦官たる明の魏忠賢の生祠は、疊次言明せし如く寧しろ標準型生祠と稱す可く、就中董昌の場合は比較的史料の備はれる點から特に詮索に價する者である。

(五)

上來四節に亘り論述せし所、或は明證を缺く場合もあり、妄斷の譏りを免れないかも知れないが、而し之位の斷案は歴史家の見識として許されても宜しいであらう。

茲に擱筆するに當り、董昌の生祠に關し左の如き論

證を試み、生祠の真相を摘抉し以て參考に供し度いと思ふのである。それは已に指示せし『欽定全唐文』卷八百二十一所收の『吳越備史』（學津討原本）卷一所收の「命錢鏐討董昌詔」に、

……而自覆鼎必折。而遂傾因憑生祠。輒有狂

謀。假陳妖異惑亂。邪巫鼓譟。危樓僞爲建國不思理。代徒生大吠之音。欲就叢祠。妄舉狐鳴之兆。

云云

とあり、撰文の王搏の言に據れば、董昌の生祠の正體は妖異惑亂の所産であると云ふ。猶ほ『吳越備史』卷一武肅王丙辰三年春正月の條に依れば、彼の生祠は唯一でなく、諸郡に數多起され、その生祠には土馬を置き、誑言する者ありて土馬嘶き發汗せば賞與せらるると云ふ。亦彼が僭亂を圖りし際、妖人應智等竟ひに幻惑を以て進み、愚民俗吏にして龜魚の符印を致す者日に百を以て數へると云ひ、僭號を立てるを議するに及び、客ありて、

使倪德儒語昌。中和辰巳間。越中嘗有聖經云。有

羅平鳥。主越人禍福。敬則福。慢則禍。於是民間

悉圖其形。以禱之。今觀大王署名。與當時鳥狀相

類。乃圖示昌。昌欣然遂以爲號。僭立之際。年月日時。用卯從妖言也。

と云ひ、彼が僭立の際の妖言を特筆してゐる。

是を以て觀れば、董昌の生祠は明かに妖的存在であると云ふ事が出来る。否、董昌若しくは魏忠賢の生祠に依り代表せられたる支那生祠の大部分は畢竟支那社

會の妖的信仰の所産であると云ふ可きである。

曩日私は白衣會に就きても同様の私見を發表して置いたが、今日再び生祠に關しても亦斯る結論に到達したので、併せて識者の叱正を仰ぐ次第である。(完)

—昭和十九、四、二十八、改稿—

京大東洋史學科講義題目

本年十月より明年三月までの文學部東洋史學科講義題目は次の通り

講義	東洋史概説第一部	那波 敦 授
同	右第二部宋元史概説	宮 崎 敦 授
特殊講義	唐代の社會	那波 敦 授
同	支那政治思想	宮 崎 敦 授
同	漢民族の南方發展史	田村 助 敦 授
同	太平天國の研究	外山 講 師

同 蒙古史

愛宕 講 師

演習 唐代民間文書

那波 敦 授

講讀 歷代食貨志(漢書食貨志)

宮 崎 敦 授

同 廿二史劄記(明史)

田村 助 敦 授

新卒業生及び卒業論文題目

本年九月、東洋史學科卒業生及び卒業論文題目は左の通り
 北宋時代の錢荒について 厚地 照彦
 唐の宰相張説の政治活動について 由利 和久